

第35回全国中学生人権作文コンテスト 青森県大会入賞作文



人権イメージキャラクター
人KENまる君



人KENあゆみちゃん



法務省と全国人権擁護委員連合会では、次世代を担う中学生の皆さんが、作文を書くことを通じて、人権尊重の大切さや基本的人権について理解を深め、豊かな人権感覚を身に付けることを目的として、昭和56年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しています。

今年度は、これまでで最多の7,584校、97万3,865編、青森県内から123校、7,883編の応募がありました。

いずれの作品も学校生活、家庭生活あるいは地域での体験を基に、人権尊重の重要性と必要性について、中学生らしい純粋な感覚で鋭く捉えたすばらしい作品です。

なお、中央大会の入賞作品については、法務省ホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

【法務省ホームページ】

http://www.moj.go.jp/JINKEN/index_keihatsu.html

http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken05_00026.html

人権に関する問題でお悩みの方は、お気軽にご相談ください。

みんなの人権110番



0570-003-110

ゼロ ゼロ みんな の ひやく とお ぼん

子どもの人権110番



0120-007-110

ゼロ ゼロ なな の ひやく とお ぼん

(通話料無料)

女性の人権ホットライン



0570-070-810

ゼロ ナナ ゼロ の ハートライン

インターネット人権相談受付窓口

インターネット人権相談

検索

パソコン <http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken113.html>

携帯電話 <https://www.jinken.go.jp/soudan/mobile/001.html>



Human Rights
青森地方法務局・青森県人権擁護委員連合会



最優秀賞 1編

協議会	作品名	中学校名	学年	氏名
十和田	共に生きる	三沢市立第五中学校	3	津軽 紫音(つがる しおん)

優秀賞 2編

協議会	作品名	中学校名	学年	氏名
弘前	これからの私	弘前市立津軽中学校	2	白取 苑来(しらとり そら)
十和田	小さなうわさ	六戸町立六戸中学校	1	佐々木 亜優奈(ささき あゆな)

青森地方法務局長賞 1編

協議会	作品名	中学校名	学年	氏名
五所川原	自分の意思を伝えろ！後悔するぞ！すごく！	中泊町立小泊中学校	3	太田 菜月(おおた なつき)

青森県人権擁護委員連合会長賞 1編

協議会	作品名	中学校名	学年	氏名
青森	孤独	青森市立戸山中学校	2	牧野 寛也(まきの ひろや)

青森県教育委員会教育長賞 1編

協議会	作品名	中学校名	学年	氏名
八戸	祖父と私の一歩	八戸市立第二中学校	3	白戸 麻優紗(しろと まゆさ)

東奥日報社長賞 1編

協議会	作品名	中学校名	学年	氏名
むつ	考え続けるんだ	むつ市立大平中学校	3	川上 莉香(かわかみ りこ)

奨励賞 10編

協議会	作品名	中学校名	学年	氏名
青森	勇者	外ヶ浜町立蟹田中学校	3	石岡 ほのか(いしおか ほのか)
むつ	生きる権利を守る	むつ市立川内中学校	2	布施 雄大(ふせ ゆうだい)
五所川原	一人の人間として	鶴田町立鶴田中学校	3	佐藤 香(さとう かおり)
弘前	心の手がつながるように	弘前市立東中学校	1	山田 千晶(やまだ ちあき)
八戸	高齢者と人権	八戸市立第二中学校	1	佐々木 あゆな(ささき あゆな)
八戸	小さな人権大きな強さ	八戸市立三条中学校	1	堀川 裕花(ほりかわ ゆうか)
八戸	言葉の力	五戸町立五戸中学校	1	小田 怜奈(おだ れな)
十和田	あの子と私	十和田市立東中学校	3	赤沼 咲良(あかぬま さくら)
十和田	いじめから生まれるもの、失うものの	十和田市立東中学校	3	松橋 瑞月(まつはし みづき)
十和田	僕が考える「いじめ」	青森県立三本木高等学校附属中学校	1	前田 晃央也(まえだ こうや)

入選 13編

協議会	作品名	中学校名	学年	氏名
青森	いじめのない社会への一歩	青森市立筒井中学校	2	東山 美鈴(ひがしやま みすず)
青森	いじめについて	青森市立三内中学校	3	中村 寿美花(なかむら すみか)
青森	自分と他人	平内町立小湊中学校	3	辻村 朱美(つじむら あけみ)
むつ	無知の恐ろしさ	むつ市立むつ中学校	3	今村 未来(いまむら みく)
むつ	友達について	むつ市立近川中学校	2	小向 さくら(こむかい さくら)
むつ	いじめ～強い者と弱い者～	風間浦村立風間浦中学校	2	五十州 ひかり(いそす ひかり)
五所川原	地球の資源	五所川原市立 五所川原第三中学校	1	神 萌霞(じん めいか)
五所川原	願い	鱒ヶ沢町立鱒ヶ沢中学校	3	平沢 杏菜(ひらさわ あんな)
五所川原	絶望と希望	中泊町立小泊中学校	3	阿部 みらい(あべ みらい)
弘前	友達との仲直り	弘前市立第五中学校	1	佐藤 菜都乃(ささき なつの)
弘前	普段の心	弘前学院聖愛中学校	2	坂本 庸明(さかもと ようめい)
弘前	偏見や差別のない社会へ	平川市立尾上中学校	1	宇野 美桜翔(うの みおと)
八戸	自分を越えて	八戸市立鮫中学校	2	八森 聖菜(はちもり せいな)

共に生きる

三沢市立第五中学校 3年 津軽 紫音

中学一年の妹は、学校から帰ってくると毎日、学校での出来事を片言ながらも少し興奮気味に話してくれる。妹は感情をうまくコントロールできないときがあり、時には出かけた場所で出会う人全てに大きな声であいさつをして驚かれたり、何となく避けられたりすることがある。でも妹は僕たち家族にとって本当に大切な存在だ。

僕の妹は生まれてすぐに体に障がいがあるとわかり、そのまましばらく入院していた。僕は当時二歳だったので妹に何が起きているのか、まったく分からなかったが、父からは「ちょっと具合が悪いんだって。」と言われた。後日お見舞いに行くと、妹の体には何本ものチューブがつけられそれが機械とつながっていたことを鮮明に覚えている。

そのときの僕は「こんな妹欲しくない。」とってしまった。体にチューブや機械がついている妹とは一緒に暮らしたくないと、二歳の僕は思った。

しかし、退院して家に帰ってきた妹にチューブや機械はついていなかった。そしてその日、母は妹のことを教えてくれた。「あの子は重い病気になってしまってもう治らない。」と。母はたった二歳の兄にきちんと丁寧に説明してくれた。

小学校に入学する年齢になった妹は、養護学校に通い始めた。そこでは自立に向けて日常生活の訓練を主に学習していて妹は毎日楽しそうに通っている。放課後は、児童デーサービスを利用しており、複数の学校から集まってくる子供たちと過ごす。様々な個性の生徒がおり、車いすの人や言葉を話せない人もいる。そのような環境の中で毎日を送っている妹は、例えばかぜをひいて病院に行くと、車いすの人が気になるのかそばに行って話しかけることがよくある。車いすの人にやさしく接することが自然にできるのだ。また、僕が咳をしたり、筋肉痛などで辛そうにしていると妹はすぐに「大丈夫？」と声をかけて気にかけてくれる。ほんの少しの言葉で僕は心があたたまりうれしい気持ちになる。外にでも妹は誰に対してもあいさつをする。不思議なものを見るように避ける人もいるが、逆に僕は「自分はふだん、元氣なあいさつをしていないなあ。」と気づかされる。

妹は純粋で素直な気持ちを持って行動できるのだ。そして天真爛漫な妹はいつも家族の中心にいて、僕たち家族の輪が保っているのは妹の存在があるからだと思う。

このような妹の行動は一般社会で迷惑になることがあるかもしれないが、しかしまた、一般社会で大切なことでもあると思う。人と人とのつながりの中で、他人を思いやり、気づかい、あいさつする心は、必要不可欠なものである。それを障がいのある妹が自然に行っていることに僕は時に気づかされて、驚くのだ。

例えば車いすの人を見かけたときに、人はどのようなことを考えるか、そして行動するか。僕なら積極的に話しかけ、手助けをするということは少し勇気がいることだと思う。障がいのある人に自然に声がけしたり思いやりの心で手助けするのは難しいことだと思う。自分の経験したことのない生活をしていると思うと気軽に声をかけにくいのだ。また、あいさつは大事だということを知ってはいるが、僕たちは状況や気分によって左右されて小さな声しか出せないことがある。いつでも全ての人に自然に声がけするというのも慣れていないとけっこう難しいものだ。

妹には障がいがあって、いわゆる健常者中心の社会の中で生活することにいくらかの困難を感じていることだろう。しかし妹の純粋な心は、僕たちが不慣れな“やさしさ”や“思いやり”を簡単に行動に移せている。僕たちも普段から、周りに障がいのある人がいることに気づいたらあれこれ考えずに、自然に声をかけていってよいのではないだろうか。

障がいのある妹と生活するのは大変なことが多い。しかし妹が赤ちゃんだった時、命を助けるためにつながっていた機械とチューブは今、妹の純粋な心と家族をつなぐ目に見えないチューブに変わり、妹は僕たちに生きていくうえで大切なやさしさや思いやりを気づかせてくれている。妹は僕を助けてくれている、今となってはかけがえのない存在だ。

妹は一人では生きていけない。家族や多くの人々の手助けが必要だ。しかしそれは障がいのない人も同じことだ。みんな同じだ。皆が平等に生きる権利を持ち、お互いに支え合って共に生きていくのだ。

これからの私

弘前市立津軽中学校 2年 白取 苑來

「耳が聞こえないのは、お母さんのせいだ。」

これは、私が中学校一年生の時に、ささいな事で母とけんかをした時に言った言葉だ。私は、生まれた時から耳の聞こえが悪い。先天性難聴という病気があり、今は両耳に補聴器をつけているので、なんとかみんなと会話をする事ができる。

母はよく私の小さい頃の話をしてくれる。私の病気は私が生まれた病院で新生児聴力検査をやっていてそこで発見してもらった。母は最初、受け入れる事ができず何かの間違いであってほしいと思っていた様だ。大学病院を受診し、とりあえず一才まで様子を見ようと言われたそう。その間の私は笑う事もなく、あまり泣く事もなく、とても育てるのに楽な子だったらしい。二才年上の兄が大きな声でさわいでいてもぐっすり寝てる子だった。

ある日、私がテレビに背中を向けて座っていた時に、母はテレビのスイッチをつけた。テレビでは歌のお兄さんとお姉さんが歌っていた所だった。テレビに映っていた子供達は手びょうしをしたり歌にのっていたが、私はテレビの方に振り向かなかったそう。母はやっぱり聞こえていないのかなと思いきりテレビのボリュームを上げていった。テレビの音量がこれ以上上がらない所まできたら、やっと私は振り返ったそう。その時に、母はやっぱりこの子は耳が聞こえていないと確信したそう。

そこからの母は、とても行動的になった。生後六ヵ月には、兄が通っている保育所の子育てサークルに連れていった。そこで、他の子の大きな笑い声に反応している私を見て喜んでいたので。

一才の誕生日の前に再び大学病院を受診した。検査の結果、やはり先天性難聴と診断されて補聴器を作る事になった。

初めて補聴器をつけた時、病院の先生が、母に向かい補聴器のスイッチを入れませぬと言った。スイッチを入れて病院の先生が、「苑來ちゃん。」と言ったら、私はビクツと反応したそう。

それを見た母も、「苑來。」と言ったら、母の方を振り返ったらしい。その日は病院の待ち合い室、外での車の音全ての音に反応していたそう。

その後、私は兄と同じ保育所に通いながら弘前ろう学校で言葉の訓練をした。

こうやって今の私がいる。私はいろいろな人に支えられて成長してきた。

決して一人では生きてこれなかった。

そんな中、母に言った「耳が聞こえないのは、お母さんのせいだ。」

この言葉を言ってから私は三週間位、祖母の家に家出した。

その間、母は一度も帰って来いと言わなかった。

その後、母になんで帰って来いと言わなかったのか聞いてみた。母は、

「いつかそう言われる日が来ると思っていたから。」と言った。

母は私を耳が聞こえない体に生んでしまった事をずっと気にかけていた。だから私が、いつかは母に対して耳が聞こえない事の不満をぶつけてくると思っていたそう。

私は母から小さい頃の話聞いた時、母の気持ちを知って、母が本当に悪いのかと考えた。私の耳の聞こえが悪いのは誰のせいでもない。そう思えるようになった。

私は悪い事を人のせいにしてしまう所がある。母とのけんかで言ってしまった一言、どれだけ母を悲しませてしまったらうか。それでも母は私が言ってしまった一言に何も言わなかった。私と違い強い人だと思った。

母から将来私が子供を生んだ時、同じ難聴の子が生まれてくる可能性が高いと教えてもらった。その時に私は母の様に子育てができるだろうか。少し不安もあるが、母は私に難聴の子供が生まれたら、一緒に子育てをしてくれるとも言ってくれた。だから今は何も不安がない。

世の中には、いろいろな障害のある人がいる。その中には、私の様になんでこんな体で生まれてきたのだろうと思いき親を責める人もいると思うが、決して親のせいではないと私は伝えたい。どこの親も一生懸命育ててくれているのだから。

私はそうやって家族に支えられて生活している。だから、私も家族を支えていきたい。補聴器をつけていれば大好きなピアノも弾けるし、ネプタのかねもできる。

これからの私は、障害に負けず、あきらめず、何でもチャレンジしていく。そして、得たことを周りの人へどんどん伝えていき、支えられっぱなしだった自分を変えていきたい。そして、自分のいる世界を広げていきたいと思っている。

小さなうわさ

六戸町立六戸中学校 1年 佐々木 亜優奈

私が小学五年生の時、弟は小学校に入学した。弟は生まれつき腸の病気があって、走ったり、少し腸のほうに強い震動を与えてしまうと、つい便がもれてしまう。そんな厄介な病気であった。だけど私は、弟が入学しても病気のことはあまり気にはとめなかった。家に帰ると親がやってくれていたからだ。

ある日、私は教室で授業の準備をしている時、そのうわさは立てられた。

「亜優奈の弟、着がえを持って先生とトイレに行ってたよ。」

「おもしろいんじゃない。」

その小さなうわさは私にとって大きな心の傷となった。弟はそれ以上に傷を負ったと思う。私は、その人たちに「病気だからしょうがないんだ。」と言った。

今考えるときっと私もダメージを受けていたので、相手には聞こえないような弱い声で言ったのではないかなと思う。その日の夜は、親にも話したし、弟には、「今度言われたら話してよ。」と自分的に励ましの言葉をかけたつもりだった。けど、弟の表情はどこかさびしそうだったように思える。次の日の朝、私は台所へ行こうとすると弟のぐずる声と親の心配する声が聞こえた。行ってみると、弟は朝食を食べずに泣いていたのだ。そして、「学校に行きたくない。」と連呼していた。

「大丈夫だよ。」と言ったけど弟は学校に行く準備もしていなかった。結局弟はその日学校を休んだ。

私は実際体験し、分かったことがある。それは、外見から見て分かる障害者と外見だけでは分からない、病気や障害のある人がいることを。弟の場合、外見から見ると元気のいい男の子のようにしか見えないが、本当は入退院をくり返すとも病弱な男の子なのであった。ようやく元気になっても、日常生活の中では今までとても苦労してきた。私は後悔した。「もう少し、弟のことを分かってあげていれば…。」「病気のことを気にかけてあげればよかった…」と。他人なんか一目見ただけで「あの子はああだ。」「あいつはそうだ。」と決めつける人が多い。今回のことだってそう。だから、一番よく分かっている自分が守ってあげられなかったのがとてもくやしかった。この日から私は、弟の病気を深く理解しようと決めた。だから、自分の身近な友人にも弟の病気のことを教えてあげた。友人も理解してくれた様子で話を聞いてくれたので、少しうれしさを感じたような気がした。弟が休んだのはその日だけで、次の日には元気に登校した。一日だけの休みでも、その間に知ることのできた事実を得られたことは自分にとって『大きなもの』となった。

中学生になった今も弟のことは気にかけている。小三になった弟は今でも学校生活を楽んでいる。まだ、病気の関係で自分で着がえをしたり、便がでてしまったり、夜中につい小便をもらしてしまうこともある。でも、幸いなことに弟のクラスの人や友達はどううわさを立てたりすることはなかった。それはきっと弟の病気を理解してくれているからではないかと思う。そんな弟たちのクラスのみんなにはとても感謝している。このことは、弟に限ったことではない。弟と同じ腸の病気のある子、もしかしたらそれ以上に辛い思いをしている子だっているはずだ。そんな時、私たちはその人たちをどのような目で見るとしようか。温かく見守って手を差し伸べてあげるのか、それとも、差別するように冷たい目で見てうわさをたてるのか、そんなの絶対に温かく見るに決まっている。助けを出したりすることは勇気のいることで正直言うと私もきっと出来ないと思う。でも、せめてうわさをたてずに温かく見守ってあげることが私をふくめ、すべての人たちができることだと私は思った。病気なんて簡単に治るものではないし、この先弟は一生この病気とともに成長していくのかもしれない。だけど、その中で弟のことを理解してくれる人がたくさんいてくれればきっと弟だってうれしいし、家族だってうれしくなると思う。私たちは障害者には優しくしましょうとか助けてあげましょうなどを教えてもらい、いつもイメージしていたのは外見からの障害者だけであった。私がつけ足しをするなら「外見では分からない病気のある人」にしたい。そして、こんな人もいて、それぞれ悩みを持っているのかと多くの人に知ってもらいたい。

『身近な人に、もしそんな人がいたら…』

この文を見て、何を思うだろうか。私はこう思う。身近だからこそ分かること、分かっていることがあるから、それを知らない人たちに伝え理解してもらおう。それこそ、私たちと病気があったり、障害がある人との平等なつながりを築く大事な一歩になると私は思う。

自分の意思を伝えろ！後悔するぞ！すごく！

中泊町立小泊中学校 3年 太田 菜月

友人に嫌気がさした。皆さんも一度はそう思ったことがあるだろう。ちょっとしたことで、イラッとしてしまい、友人に対して冷たくなったり、こっそり陰口を言ったりしたことも…。私もその一人であった。

私が小学四年生の頃、お互いを親友と言いあえる程の友人がいた。よく、放課後、二人で遊んだものだった。友人は私のことを好きだともよく言ってくれていた。私も友人のことが好きだった。あることを除いては…。あることとは、友人には多少強引なところがあり、自分のやりたい遊びでないと駄目だとか、自分がこうだから、あなたはこうでなければならないなどと我が儘なところがあった。だから私はその我が儘に付き合い合わせることが多かった。ちなみに、それが嫌で友人に訴えたこともあったが、当時、気の弱かった私は友人に言い負かされて、泣いてしまうのがオチだった。しかし、私だって限界がある。段々友人の強引さに怒りを覚えてきた。そんな時だった。私のクラスにこっそりとしたイジメが起きていた。私はある友人(これから先は「A」とする)Aに「〇〇って、ムカつかない？」(〇〇とは、友人のことである。)と、言われた。限界だった。私はその言葉にうなずき、友人の悪口を言いまくった。それが悪いことをしていると知っていても、言ってしまった。すると、Aは、

「うんうん。分かるわあ…。」

などと、うなずきながら、共感してくれた。すると、罪悪感が消えて、スッキリした。それから、私の悪口はエスカレートしていった。

そんなある日だった。どこからか私が友人の悪口を言っているのがばれてしまい、友人に呼び出された。正直、怖かった。怒られるのだろうと分かって、覚悟していても怖かった。言われた場所に行き、扉に手をかけた。手に嫌な汗がじっとり出ていた。扉を開けると、友人がいた。鬼の形相でそこにいるだろうと思っていたが、違った。そこにいたのは、顔を真っ赤にさせ涙ぐんだ友人だった。入った途端、罵倒されると思っていた私は固まってしまった。恐怖が後悔に変わっていった。友人はポロポロと涙をこぼしながら言った。

「何で、私の悪口言うの？…」

ポカンとしてしまった。なぜなら、私は友人は私が友人の悪口を言っている理由を知っていると思っていたからだ。しかし、思えば私はしっかりと自分の意思表示をしたことがなかった。嫌だとかはっきり言ったことがなかった。つまり、友人は、いきなり親友だと思っていた私に悪口を言われ、散々な目にあったのだ。それに気付いた途端、目が熱くなり、後悔と罪悪感で胸も苦しくなった。喉に何か詰まって、声も出ず、呼吸がしづらくなるような気分だった。それでも、友人の問いに答えねばならない。それしか、今の私にはできない。

「だって…。君の我が儘が嫌だった。耐えられなかった。」

友人は、

「ゴメン…。」

と言った。耳を疑った。本当に謝るべきは私だ。なぜ謝った？なぜ責めない？混乱した。続けて友人は「もう我が儘言わないから、また遊んでくれる？」

ただでさえ息苦しいのに、また、苦しくなった。体が押しつぶされそうだった。私は

「なぜ、私を責めない？」

と聞いた。すると、友人は

「だって、私達、親友でしょ？ケンカの一つくらいあるよ。それに、あなたは今まで私の我儘を聞いてくれた。あなただけ責めるのは変だと思うの。」

と言った。思わず友人に抱きついた。頬に水が伝っていくのを感じた。声を振り絞り、ひたすら

「ゴメン。本当にゴメン。」

と謝った。

その後、私達はお互いを気遣い、よりいっそう仲良くなったのだが、友人は遠くに引っ越してしまった。離れ離れになったが、今でも文通をしている仲だ。たまに他の友達と遊んでいて、その友達に不満を持ったりもするが、あの事を思い出し、その友達に非があるのならば、はっきり嫌だと言い、私の一方的な不満であれば、少しだけ距離を置き自分を落ち着かせようとしている。友人のおかげで私は人との付き合い方、他人を傷付けることによる罪悪感と恐ろしさを知ることができた。突然、親友だと思っていた人にひどいことをされた友人の気持ちを考えると、今もある罪悪感が更に重くなり後悔をする。だから、このような事が二度と起こらないようにする。それが、せめてもの償いだ。

「孤独」

青森市立戸山中学校 2年 牧野 寛也

小学四年の頃、僕には大きな転機が訪れた。特別支援学級から、普通学級に入ること。それは、僕にとってとてつもなく大きい転機だった……。

『自閉症。』僕はそれが主な原因で、小学校に入ってから、特別支援学級に通っていた。近ごろの社会では、よく耳にする「自閉症。」きっと、僕と同じようにいろんな壁にぶつかる人も多いのだろう。

しかし、僕を苦しめたのは、その診断名ではなく、特別支援学級に通っているということに対する周囲の目、そして対応だった。僕は小学校に入学してからずっと、孤独だった。普通学級でない、それだけで、周りとはみんなと違う目で見ているような気がして、いつも孤独を感じていた。

それが、一転して「普通学級」へ。なぜなのか、よくわからないまま、でも、おそらく二度とないことだと感じていた。普通学級に入れば、みんなと同じ…と、喜んでよさそうなものだが、決してそうではなかった。最初の頃は、周りの人たちが信用できなくて、正直行きたくないと思った。なぜなら、自分が避けてきた人たち、それは全て普通学級の人たちだったからだ。

あれから四年半が過ぎた。いろんな人に説得され、励まされ、中学二年になった今も、僕は普通学級に通っている。

まだ十数年しか生きていないけれど、こういった経験を通して、僕は「孤独」が一番辛いものだということを知った。

支援学級にいた頃、そして、いたという事実は、人との関わりがなくて、僕は本当に孤独を感じていた。…死のうと思ったことだってあるくらいだ。自分の居場所なんて、ないと思えて。

でも、幸いにして、自分を慕って心を開いてくれる仲間が一人、二人と現れて、僕の心は変わることができた。一人ぼっちでない生活。これは、何よりもうれしいことだ。

中学二年の道徳の時間。忘れかけていたことを思い出す出来事があった。その日の資料は、ある中学生がいじめによる孤独に耐えられなくなり、死を考えてしまうという話だった。過去の経験と重なり、他人事には感じられなかった。

「本当に、孤独のままでもいいのか。」そう、強く思った。

「孤独」というのは、決して誰も周りにいないことではない。むしろ、大勢の人に囲まれているのに、心がぼつんと浮いていて、誰とも交流できずにいることだ。多くの場合、ちょっとした誤解が原因でそうなるのだろう。

人と違う、それだけで冷めた目で見たり、自分より何かが劣っているというだけで、見下したり…。その偏った見方、考え方が、やがて無視、ののしり、いじめにつながるのだ。自分を正しく理解してもらえない、そして、分かってくれようとしなないことが、どれだけ辛いことか…。

でも、もっともっと悲しくて、辛いこと。それは、加害者の行為ではなく、加害者でも、被害者でもない、「どちらでもない」周りの人たちの存在だ。「どちらでもない」人たちは、加害者を注意しない、そして、被害者を助けないという、二重の罪があるのだ。その無関心が、何より最も孤独へとおとし入れる。

だから、僕たちはもっと気づかなくてはいけない。一人ぼっちでいる人だけでなく、誰にも心をさらけ出せず、心が一人ぼっちな人はいないか。

そして、僕たちはもっと見方を変えなくてはならない。人と違うことは、決して特別なことではない、と。

今の僕には、それを伝えることができる。そして、僕と同じような立場の人の心に、寄り添うことができる。「自分だけよければ、それでいい」という人が、多いように思う。でも、みんながそう思うようになってしまったら、やがて、みんなの心がバラバラになって、世の中の人がみんな、孤独になってしまうのだ。

一人ぼっちでいいはずがない。お互いを正しく理解して、もっと温かい世の中にしていかなければならない。

今、僕は、自分を必要としてくれる仲間の存在に感謝して、毎日を過ごしている。

祖父と私の一步

八戸市立第二中学校 3年 白戸 麻優紗

初孫だった私は、祖父母からとても大切に育てられました。特に祖父は私を可愛いがってくれました。私が小学校に入学すると、ボランティアで「防犯指導隊」に所属していた祖父は、毎日黄色いジャンパーを着て通学に付き添ってくれました。「まるで麻優紗専門のボディガードだね。」と、祖母はよく笑っていました。運動会やマラソン大会等の行事も必ず応援に来て、「よく頑張ったね！」とほめてくれました。家も近く自転車でお菓子や果物を持って遊びに来てくれるので、私と妹はいつも楽しみにしていました。そんな祖父が「脳梗塞」と診断されたのは、つい最近の事です。

五月の祖父の誕生日には、妹と二人で作ったパンを届けました。白内障を患っていた祖父は、少し見づらそうにいましたが、それ以外はいつもの祖父と変わらなかったのだから私たちはパンを渡すと「またね！」と言って帰ってきました。いつでも遊びに行ける距離なのに、最近忙しさのあまり、祖父の事を気に掛けることもありませんでした。

夏休みに入っただけですが、祖父の白内障の手術予定日でした。祖父から入院中の朝顔の水やりを頼まれていた私は、「今日から入院だよな？」と母に確認しました。「そうだよ。水やりよろしくね。」と言われたので、その日の午後、祖父の朝顔やトマトの水やりに行きました。すると、急に母から連絡が入り、祖父は眼科ではなく市民病院にいるとの事でした。状況のわからない私と妹は、母が帰って来るまで不安でいっぱいでした。母が帰ると、

「おじいちゃん、どこが悪いの？」

と、恐る恐る妹が尋ねます。

「おじいちゃん、脳梗塞だって。軽く右の手足に麻痺があるの。今から治療をしながら、リハビリを頑張るって。」

と母が答えました。一学期の保健体育の授業で習ったばかりで、少しだけ知識があった私は、一瞬最悪の事態を考えました。ですが、祖父の病状はそこまで重くはないようで、とりあえずほっと胸をなでおろしました。

病院は面会時間も人数も限られているので、私が祖父と面会できたのは、入院から三日後でした。ちょうどリハビリ中でしたが、「一緒にどうぞ。」と声をかけてもらったので、私はリハビリを見学しました。久しぶりに会った祖父は、

「車いすになっちゃったよ。」

と少し寂しそうに言いました。いつも元気で、自転車でどこまでも買い物に行く祖父の車いす姿は、正直ショックでした。ですが、リハビリの先生と一生懸命頑張る姿を見て、思わず、

「早く元気になって家に帰ろう！それまで、朝顔とトマトの水やりはまかせて！」

と声をかけました。すると祖父は、嬉しそうにうなずきました。リハビリの先生は、よく通る大きな声で、祖父に話しかけます。そして、立ち上がる時や歩く時も、「お手伝いしますから、自分で頑張ってみて。」と言います。全部代わってあげる事は無理でも、祖父が頑張るお手伝いなら私にも出来るかな。と、私も一緒にお手玉を使ったリハビリに参加しました。帰り際、

「今度来る時は、収穫したトマトも持って来るね。」

と言う私に、祖父は、動かしづらい右側の手を振ってくれました。

退院はいつになるかわかりませんが、祖父の家に手すりをつけたり、段差をなくすなどのリフォームが必要になるそうです。祖父は小柄ですが、それでも祖母が支えるのは大変です。だから、出来る限り一人で日常生活が送れるように、今はリハビリに専念しています。

小さい頃の私は、祖父に七夕祭りや三社大祭に連れて行ってもらいました。今日、家からお祭り広場まで歩いてみて、ふと考えた事があります。今度、もし祖父と一緒に祭りを見に来られたら、どの道が一番歩きやすいのかな？と。杖をつきながらだとこの坂道は急すぎるとか、車いすなら、この道は細すぎるとか。なかなか安全な経路が無くて、びっくりしました。今まで全く気にしていなかった段差も沢山あります。健康な人はもちろん体の不自由な人も笑顔で生活できる環境は、とても大切なことだと思います。そして、「お手伝いをする。」という心配りもまた、大事にしていかなければならないと思いました。お祭り広場で、ベビーカーと赤ちゃんをだいて階段を上ろうとしているお母さんがいました。私は少しだけ勇気を出して、

「お手伝いします。」

と尝试してみました。これが祖父の病気から教えてもらった、私の大切な一步です。

考え続けるんだ

むつ市立大平中学校 3年 川上 莉香

私の学校では去年、全校で「いじめ防止宣言フォーラム」を行いました。全校生徒にアンケートをとったり、各学年委員会で意見をまとめたりとさまざまな準備をし、そして本番の日は全校生徒から多くの意見が出され、「いじめノックアウト宣言」というものができました。このいじめ防止宣言フォーラムを通して、私は自分自身の行動を振り返ることができました。

そもそもいじめは、されている人がいじめだと感じればいじめになってしまいます。陰口を言ったつもりがなくても、相手が傷つけば自分がいじめている側になってしまいます。それを痛感させられるような出来事が一年生の時にありました。

部活の同学年の女子は六人です。最初はみんな楽しく活動していました。しかし、私は肉離れで約一ヶ月間部活ができなくなりました。見学するだけの毎日が続き、みんなともなんとなく距離ができてしまったように感じていました。しかも、私は同じ怪我を何度か繰り返してしまい、部活動に参加できない期間がますます長くなってしまったのです。そしてある日突然のこと。部活で同学年の女子と一緒にいられなくなってしまいました。無視されて、部活動中一人でいることが多くなったのです。私にとってつらい日々が始まりました。学校に行くのが嫌でたまりませんでした。そんなとき先輩が言ってくれたのです。

「悩み聞くんよ？一人で抱え込まないで。」

その日から先輩に相談にのってもらい、先輩たちが話し合う場をつくってくれました。私はみんなの顔を見ることができず、ずっと下を向いていました。先輩たちが私の思いをまとめて話してくれ、

「莉香も自分の口から話してごらん。サポートするから。」

と言ってくれました。そこで、私は勇気を出して思っていることを話しました。一言一言を話すたびに涙がとまらず、声もふるえて大変でしたが、全て話し、相手にもわかってもらうことができました。この話し合いで自分の悪い所がわかっただけでなく、相手にも勘違いがあったことがわかりました。

私は中学生のうちにこのようなトラブルを経験してよかったと思っています。周りの人たちといざこざがおきるたびに、自分の悪いところや相手の思いなどを知ることができました。

大平中学校のいじめノックアウト宣言の中に、次のようなフレーズがあります。「相手のことを考えられる心を持ち、みんなが平等であることを忘れず、お互いを認め合おう。」

私に足りなかったのは自分の思いを伝えるために頑張ろうとすることでした。わかり合うためには自分のことも知ってもらわなければなりません。そうでなければ平等になれないからです。

自分の体験やいじめ防止宣言フォーラムを通して、いじめについて深く考えることができました。しかし、それだけで終わってはいけないと思います。高校生になっても社会人になっても、おばあちゃんになってもいじめについて考え続けていけるようにしたいです。そうすることが人との関わりを大切にすることにつながると思うからです。

今まで友達関係で悩むこともありましたが、その分人間関係のあり方についてじっくりと考えることができました。自己主張ばかりせず、人の話に耳を傾けること。人に優しく、自分に厳しくあること。素直な自分でいること。これらをしっかりと実践し、そしていつか必ず人に信頼される自分になりたいと思っています。